

別紙 4

報告番 -	※ -	第
----------	--------	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 The Role of Psychological Essentialism in Intergroup Attitude Formation

(集団間態度の形成における心理的本質主義の役割)

氏 名 塚本 早織

論 文 内 容 の 要 旨

我々は、ある人を社会的に意味のある特定のカテゴリー（社会的カテゴリー）に分類することで、その人に関する情報を得るという心理的機能を持ち合わせている。例えば、日本人だから几帳面に違いない、女性だから感情的に違いない、などといったように、社会的カテゴリーから個人の特徴を推測することができる。ただし、このように個人の特徴をある特定の社会的カテゴリーに帰属する背景には、何らかの心的基準が存在すると考えられる。その基準の1つとなるのが、「心理的本質主義」と呼ばれる素人理論である。これは、「日本人には日本人の血が流れているから几帳面だ」といったように、血筋に表象されるような、必要不可欠な「本質」や「核」の存在を根拠にした素人なりの社会的カテゴリーの理解を指す。心理的本質主義によると、カテゴリー間にみられる違いは不変で生得的な「本質的」違いとなるため、自分とは異なるカテゴリー（外集団）の排斥を正当化することができる。我々は、実は直感にすぎない心理的本質主義という素人理論によって、自分や他者の所属や、そこから推測される属性を認識し、他者を受け入れたり排斥したりする判断を行っているのだ。本論文は、このような特徴を持つ心理的本質主義がもたらすカテゴリーに対する認知と態度への影響について、理論的、および実証的に検証したものである。

本論文では主に、心理的本質主義と偏見の関係についての先行研究にみられる結果の不一致を指摘し、その原因を議論した。心理的本質主義は外集団に対する偏見的態度を導くといわれてきた。しかし、心理的本質主義が集団間態度に与えるこのような負の影響は、一部の社会的カテゴリーに対する態度に限定される。例えば、心理的本質主義信念を強く持つ人は、移民や社会的に地位の低い集団に対する態度が排他的であるが、同性愛者に対する態度はより寛容で

ある，といったように，心理的本質主義が偏見に与える影響について，一貫した結論が出されていないという現状がある。

そこで，本論文では次の3点に着目した理論的及び実証的検証を行った。

まず，異なる研究者間において心理的本質主義によるカテゴリー認知を説明する概念が一致していないという問題点を挙げた。本論文ではその背景に，「理論的アプローチ」と「観察的アプローチ」の2通りのアプローチが存在することを指摘した。前者は，自然や化学的物質を分類する際の理論が社会的カテゴリーの認知にも適用されていることを説明する。例えば DNA や原子に関する情報は，樹木や草花を分類したり，銅が真に銅であることを証明したりする際に役立つため，自然カテゴリーは本質的要素によって分類可能である。この理論を社会的カテゴリーの分類にも適用することがある。したがって，心理的本質主義によるカテゴリーの認識を説明する概念として，次のような表現を用いる：「このカテゴリーは人工ではなく自然にできたものである」，「このカテゴリーの成員かどうかは生まれながらに規定される」。一方で後者は，本質に関する信念がもたらす認知や推論の結果から，心理的本質主義を説明する。ステレオタイプの判断を行いやすいほど本質を信じているといった形で，比較的表層的で観察可能な情報を基に概念化する。したがって，このアプローチをとる研究者は，「成員同士は同じ特徴を共有している」，「このカテゴリーの属性は成員の特徴の多くを説明する」といった概念から心理的本質主義によるカテゴリー認知を操作的に定義することが多い。このように視点の異なるアプローチが存在するが故，心理的本質主義の概念的定義は一貫せず，偏見に与える影響に異なる影響を与えることを指摘した。

そこで，研究1では，特定の社会的カテゴリーに対する心理的本質主義信念の心理的構成概念を明らかにすることを目的とした。「日本人」カテゴリーに着目し，日本人回答者が日本人の本質を説明する際に用いる概念間の関連性を明らかにした。その結果，日本人カテゴリーに関する心理的本質主義は4つの下位概念によって構成されていることが明らかになった。特に，第一因子として「血統」の概念が抽出されたことから，日本人カテゴリーは自然カテゴリーであるかのように認識されていることが明らかになった。また，第二因子には，理論的アプローチと観察的アプローチ両方の構成概念を含む「本質性」因子が抽出されたことから，自然に関する素人理論と観察可能な情報による説明は，相互に補強しあう概念を用いている可能性が示唆された。

次に，心理的本質主義がなぜ偏見的態度の形成に寄与するのかについて理論的説明が不足しているという視点から議論を行った。社会的カテゴリー理論によると，人は自分が所属する集団（内集団）に対してポジティブな，外集団に対して比較的ネガティブな態度を持つことが知られている。そこで，内集団の成員が核となる本質を共有し，一様な価値観や性格的特徴を持つと感じることは，その集団に対する好意的態度を高める可能性を指摘した。心理的本質主義信念を適用して内集団を認識することで，内集団に対する好ましい態度が助長される結果，外

集団に比較的否定的な態度を示すようになるのではないかと考えた。そこで、内集団に対する心理的本質主義の適用に着目することで、心理的本質主義と偏見的態度の関係についての心理的背景を検討することにした。

研究 2 および研究 3 では、日本人を対象に、内集団である日本人カテゴリーへの心理的本質主義の適用が、外集団との認知や態度を差別化する傾向と関連する可能性を検証した。研究 2 では特に、外集団との差異を過大に推測しやすい社会的状況を検討した。具体的には、他民族他者との認知傾向の違いが明らかになった日本人参加者は、その違いを日本人と外国人の違いに一般化することが明らかになり、その傾向は心理的本質主義による内集団認知が強い参加者においてより強く見られた。さらに、このような関連性は日本人他者との間に認知傾向の違いや類似性が明らかになった場合には見られなかったことから、特に他民族他者との違いが明らかになる場面において、内集団に関する心理的本質主義が集団間差異の過大推測に影響することが示された。研究 3 では、民族間に違いを見出す傾向の中でも特に態度の差別化を検討した。内集団に関する心理的本質主義が実験的に高められた場合、元々内集団に対する好意的評価を行いにくい (i.e., 国家主義傾向の低い) 参加者であっても、内外集団に対する態度を差別化するようになり、内集団をより好ましく、外集団をより否定的に評価するようになることが示された。以上により、内集団に対する心理的本質主義信念は、内外集団に対する認知や態度を区別する役割を担うことが明らかとなった。

三点目の論点として、対象となるカテゴリーによって心理的本質主義が集団間態度に与える影響が異なる背景に、カテゴリーに対する文化特有のものの方が影響している可能性を指摘した。先行研究によると、東洋文化圏の人は、集団規範や集団と自己の関連に価値を置き、西洋文化圏の人は個人の独立性を重視する。心理的本質主義がこのような文化的思考の影響を受けた信念なのか、あるいは文化普遍的なのかについて調べることで、これまで示されてきた偏見との関連を整理する文化的思考の役割を知ることができると考えた。

研究 4 においてその検証を行い、東洋文化圏の参加者として日本人を、西洋文化圏としてオーストラリア人を対象とし、内集団民族および自己に対する心理的本質主義の適用程度を比較した。その結果、オーストラリア人は内集団よりも自己に対する心理的本質主義信念の適用が強く、その逆の傾向が日本人参加者において認められた。すなわち、心理的本質主義の信念は文化と適用対象の相互作用によって規定されることが示唆された。

以上の議論と実証研究の結果により、外集団に対する偏見的態度の形成には、内集団を心理的本質主義に基づいて理解し、「内」と「外」を本質によって差別化する心の仕組みが影響していることが示唆された。また、偏見の対象となる集団の規模や性質、また自己との関連性に関する文化特有の適用傾向を考慮した議論が必要となることも示された。

本論文では、このような特徴を持つ心理的本質主義が、どのような具体的場面で物事の判断に影響を与えるのかを明らかにするために研究 5 を行い、その結果についても論じた。裁判員

裁判を題材に、性別に関する心理的本質主義信念が強い人ほど裁判員の性別比の偏りを判決結果の原因に帰属しやすい状況を明らかにした。本来は判決結果に影響し得ないはずの裁判員の性別という属性情報が重視される背景には、心理的本質主義による性別カテゴリーの直感的理解が関わっている可能性が示唆された。

最後に、本論文で議論した実証的研究は、状況や対象が限定されたものであるため、心理的本質主義の集団間態度への影響の全体像を説明するには実証的知見が不足している可能性がある。しかしながら、心理的本質主義を適用する集団の社会的地位や状況、さらには自己との関係を特定することで、どのような場合にどのような動機に基づいて心理的本質主義が集団間態度に影響を与えるのかを示すことができる。さらに、社会的カテゴリーの本質が現実に実在する必要がないことを前提とすると、集団間に認識される隔たりも実際は錯覚であると言えることから、心理的本質主義に関する研究が集団間態度を改善する手がかりとなる可能性がある。以上のことから、心理的本質主義が集団間態度の形成においてどのような役割を担うのかを明らかにすることは、意義のある試みであったといえる。